☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

霞河絢香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

【Ｎコード】
Ｎ２２９７Ｃ

【作者名】
霞河絢香

【あらすじ】
お寺の娘である私の前に突如現れたは、美少女三人組と妖怪一匹。なんでもあの『西遊記』に出てくる妖怪だそうな。。。そして何故だか私があの『三蔵法師』の血を引くと言う。お蔭で、無事迎えた中学生活初日から、私の人生が狂い始め……。夜な夜な美少女３人組と一緒に妖怪退治するハメに。これはそんな何の因果か、不幸な私の物語です。

第一話　三人と一匹との出会い

☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

私は妖怪や悪魔や法力など不思議なものは信じてはいませんでした。

お寺の娘である以上、幽霊とかの霊魂とかを信じなければいけないのに、それさえも全く。

なので、各地を飛び回ってるお父さんの仕事の意味がさっぱり解らなかったし『妖怪は実際に存在する』なんて言われたって『子供じゃないんだから、そんな冗談信じる訳無いでしょ？』と返すばかりでした。

でも、それは3年前の出来事が私を不思議な物や事に対して、信じるようにさせたのでした。

それ以来、私は変わるざるえないようになり、それなりのこの3年を過ごしています。

これは、そんな妖怪や不思議な事に対してシッカリ受け止める様になった、私と3人と一匹が繰り広げる物語です……。

第一話　三人と一匹との出会い

「この馬鹿ザル！　これは俺の卵焼きだ！」

「うるさいなぁ！　ボクが最初に箸を伸ばしたんだからボクのでしょ！このエロガッパ！」

朝の清々（すがすが）しい食卓。畳の上に、少し大きめな長方形のテーブルが置かれており、その上に朝食が用意されている。

朝食のメニューは明太子に厚焼き卵。そして納豆に味噌汁とお漬物という美味しそうなお料理達が顔を並べていた。

「まぁまぁ、二人共朝食から喧嘩はあんまり胃にも良くないですよ〜」

赤い髪色にロングストレートを後ろで一つにまとめ、高校の制服を身に纏った少女が、箸で卵焼きを掴みながらちょっと小柄な金髪のショートカットをした少女に罵声を浴びせている。

小柄な金髪のショートカットをした少女も同じ高校の制服を着たまま、箸で卵焼きを掴み赤髪の少女へと罵声をお浴びせ返す。

そんな様子を黒髪を肩まで伸ばした少女が、喧嘩を始めた二人を見て苦笑いをしている。

事の発端は、最後に残った厚焼き卵一カケ。

「何をぉ！　この貧乳ザルの分際で所有権を持ち出すのか！　桃！」

「貧乳じゃなくて美乳だぁ！　沙紀はいつもエロい事考えてるから大きいんだよ！　このエロガッパ！」

と、テーブルに足が乗り上がり、額と額がくっつきそうな距離で言い合っている。

どうやらすでに卵どうこうの話しではなくなったらしい。

私は最後のお味噌汁をすすり終えて、

「はい。二人共、何処に足をのけってるのかな？」

と言いながら二人の横顔に紙札を貼りつける。

「お嬢、ちょ……」

「蘭ちゃん！　ちょっ……」

赤髪の少女が何か言いかけて、

金髪の少女も何かを言いかける。

けれど私は、

「ごめん聞こえない。発」

と札に念を込めた。

バシュッ！

一瞬の閃光と共に二人のちょっとした苦痛の悲鳴があがる。
「全く……。朝食ぐらい静かに食べさせてよね、いい加減」
朝の清々しい食卓。
そんなものここ3年見たことは無かった。
何かしら朝食は騒がしいのが、すでに日常になっており、私はそんな二人にツッコミを入れるのが日課になってしまった。
「白と凛ちゃんだけだね～、いつもいい子なのは」
私は座布団に座りなおして、横に居る白兎の白を撫でる。
「三蔵法師もきっと楽じゃなかっただろうに、こんな子達のお守りをしてたんだろうからね～……」
そう。
この子達はあの三蔵法師の家来だった妖怪『猪八戒』『孫悟空』『沙悟浄』の娘達なのである。
そして私は、自分ではそうだとは思ってないけど『三蔵法師』の血を引く者らしいのである。
「岩から目覚めてここ3年。何度お札でツッコまれたことか、俺達……」
衝撃から覚めた赤髪の『沙悟浄』の娘『沙紀』が愚痴る。
「白と八戒ばかりずるいよね～……」
ため息交じりに金髪の『孫悟空』の娘『桃』が言いいながら、あははは……と苦笑い浮かべる『猪八戒』の娘『凛』をジロ見する。
「そんな事言われても～……」
困った顔浮かべ私をみる凛ちゃん。
「お嬢、今はウサギに化けてるけど、白だって、どんな物にでも化ける妖怪だよ？　俺達より純度が高い妖怪。一番怖いんだから」
テーブルに落されたさっきの卵焼きをパクリとして私に言う沙紀。

「あっ、そう」
私は軽く受け流して食べ終わったお皿をまとめる。
「マナーのいい妖怪は私は好きだけど？」

と、一言を言ってお皿などをおぼんに乗せて台所へ向かう私。
こんな３人と一匹との出会いは遡(さかのぼ)る事３年前、私が中学１年生になったばかりの事である。

それは、近づいてはいけないとお父さん言われてた倉に、近づいたのが始まり。
私は興味本位(きょうみほんい)に倉に近づいた。
ダメって言われる程、行きたくなるのが人間誰しもがある心。そう、そんな好奇心(こうきしん)にかられて、私はお父さんが地方に行っている時に近づいた。
そして鍵を持ち出し、倉の扉を開けたのだ。
中には古びた置物や、箱に入った良く解らない言葉で書かれた巻物に、大きな岩があるだけで、何も危険なものなんて見当たら無いし、ましては、お宝と言えそうな物なんて無かった。
私は『なぁ～んだ……』とガッカリしながらその場を離れようとした時、自分の耳を疑った。
まさかね～なんて思い踵(きびす)を返した足を再び倉の外へと歩ませた時、

『和尚(おしょう)、せっかく来たんだから岩触(さわ)ってけよ』
とゆう声を岩から聞いたのだ。
今度は間違(まちが)いなく。
『ン？　和尚さん来たの？　悟浄(ごじょう)？　どこどこ？？』
『うるさいボケザル。騒いだらビビッて逃げるだろうがっ』
『和尚さんなら逃げる訳(わけ)無いでしょ！　このエロガッパっ』
『ちょっと、狭(せま)いんだから騒がないでくださいよ～……』
なにやらもめてる女性の声が岩から聞こえてくる。
私は思わずダッシュでその場から離れた。
岩から話し声が聞こえてくるなんて、こんな不思議な事がありえる訳が無いからだ……。

でも、聞こえたのは事実。
怖いけど、私はもう一度確かめる為に近づく事にした。
黒くて大きな古そうな岩。岩の表面には平らに削り取られて、なにやら文字が彫ってある様だ。
『先ほどはすみません和尚様。悟浄さんは昔から口が悪くて、お逃げになった気持ちは解(わか)ります。すみませんでした。ほら、悟浄さん謝ってください』
『わりぃ……。やっと和尚さんが来たのに、帰ろうとしたからちょっと強く言っちゃった。悪かったよ……』
一人の女性の声に、最初に私を呼びかけた女性が謝る。
『この通り、悪気(わるぎ)は無かったんですよ。謝ってる事だし、許(ゆる)してあげてくださいね。
そしてですが……良かったらこの岩に手を当ててくださいはしませんでしょうか？　そうしていただけると、とてもありがたいんですけど……』
と、苦笑いする口調(くちょう)。
私は怖いという感情があったけど、手を当てたらどうなるんだろうという好奇心に負け、言われたまま岩に手を当てた。
すると、岩が一瞬まばゆいばかりに閃光(せんこう)し、私は思わず目を瞑(つむ)った。
「ふぅ～、初めまして和尚さま。これから以後よろしく」
「わ～、和尚さんもボク達と同じ女性なんだ～。和尚さまと言うから男性だと思ってたよ」
「頼みを聞いてくださってありがとうございます和尚様」
そんな声が、さっきとは違って近くに聞こえる。
私は恐(おそ)る恐る目を開けると、そこには３人の女性が立っていたのだ。
しかも、なぜか裸(はだか)で。
一人は赤い髪色のロングストレートを腰まで伸ばした女性。スタイルは良く胸も……大きい……。綺麗(きれい)な顔立(かおだ)ちに赤い瞳が特徴的(とくちょうてき)。

　その隣に立ってるのが、金髪のショートカットをした小柄な女性。スタイルは良く、隣の赤髪の子と比べれば小さいが、目立たないくらい普通に胸はある。元気のよさそうな印象と綺麗な青い瞳が印象的。

　そしてその隣に立っているのが、綺麗な黒髪を肩まで伸ばした女性。こちらもスタイルは良く、３人の中間ぐらいの胸の大きさ。清楚感が何処からとも無く感じられ、淡い紫がかった美しい瞳が印象的。

　そんな３人は、次々と私を和尚と呼ぶのである。

「和尚って、私はお寺の娘だけど、和尚って呼ばれるほど偉くないし、きっと人違い！」

　３人の裸の美少女を前に、慌てながら言う私に、

「いいえ。この岩を触れるのは和尚様の血を引くアナタ様以外ありませんよ」

　とニッコリと微笑む黒髪の女性。

「そうそう。それにボク達は和尚様に言われて岩に封じられたしね」

「面倒だけど『いつか私の血を引く力のある者が現れる。その時までここに居てください』って言われて、俺達はこの中にずっと居たって訳」

　と、次々と告げる３人。

「えっと……と、とりあえず服！！　服貸すからこっちに来て！」

　私は裸のままじゃ、ちゃんと話せないので、３人を家に案内する事にした。

「で、要するにあの西遊記の三蔵法師に頼まれて、あの３人の妖怪の娘であるアナタ達が封印されてた訳ね」

　私は、服を貸し着替えた３人を畳の部屋に招いて事情を聞いている。　大きめの私の服を黒髪の女性に。同じサイズの服を金髪の子に。そしてサイズが無いのでお父さんの服を赤髪の子に渡したのだ

った。
「はい。いつかきっと妖怪がまた暴れだすに違いないと思った三蔵法師に頼まれて、今までアナタが現れるまであそこに居た訳です」
と、ニッコリ微笑む黒髪の女性。
「間違いじゃない？」
問い返す私。
「そんな訳無いよ～。あの岩は和尚様が自分の血を引く力のある者しか開けられない様にしたって言ってたし」
「それに、ここ何度か石を触る人間が居たけど、開かなかったし、俺達の声も届いてなかった様だ」
「そんな中、こうやって私達を岩から出せたのですから、間違いは無いです」
と、すすめたお茶をすすりニッコリと。
「と言う訳で、これから私達がご厄介になります」
ぇえ……。
思わず心の中で呟いた私。
そんな私の隣を、いつの間にかに存在した可愛らしい白兎が私を覗いている。
「その子は白。ウサギに化けてますが、何でも化けられる妖怪です。普段何も無い時はその姿で居ます」
妖怪に見えない白兎。でも話が全部本当らしいからして、妖怪なのだろう……。
「あ、そういえばアナタ達も妖怪なの？　名前は？　この子だけ名前があるみたいだけど？？」
私は白兎を撫でながら、人間にしか見えない3人にそう問いかける。
「ボク達は名前あったけど、和尚様に封印されちゃってるんだ。だから名前は無いから、お互い親の名前を呼んでるよ～。悟空に八戒に悟浄ってね」
「はい。そして私達は半妖ですね。人間と妖怪のハーフ。禁忌を犯

した親の娘ですね」

と、凄(すご)いことをニッコリと微笑んで言う黒髪の女性。

「だから和尚さんが名前をつけてくれる？　俺達の名前」

「え！　私が！？」

驚く私に、

「そう」

「はい」

「うん」

と頷く三人の女性。

「和尚様が自分達の名前を決めてもらえって言われてるしな。な、悟空」

「うん。ボク達も自分の名前欲しいしね〜。ね、八戒」

「はい。いつまでも親の名前を使うのもなんですしね。決めてください和尚様」

と、言われても……私にネーミングセンスはありませんが？

何て心の中で呟く私。

しばらく考えて、色々ごちゃごちゃしながら一人ひとり指差して、

「アナタは沙悟浄の娘だから……沙紀。清水(しみず)　沙紀(さき)ね」

「よろしく〜」

と、ウィンクする沙紀。

「そしてアナタは……清楚な感じから凛。白鳥(しらとり)　凛(りん)ね」

「はい。よろこんで」

と、ニッコリする凛ちゃん。

「ボクはボクは？？」

「まって考えてるから……」

「ドキドキする！」

「猿(さる)でＯＫだよ、悟空は。又は馬鹿ザルでもＯＫ♪」

なんて言って笑う沙紀に、頬(ほほ)を膨(ふく)らませる金髪の少女。

「う〜ん……可愛らしく桃でいいや……斉藤(さいとう)　桃(もも)」

「やった。よろしくね和尚さん」
と、満面の笑顔を見せる桃。
良く頑張った、私。ネーミングセンス0な私にしては頑張ったよ……。
私は疲れながら、
「私の名前は蘭。蒼井　蘭。だから『和尚』じゃなくて『蘭』って呼んでね」
「はい。よろしくお願いします」

と、コレが私と3人と一匹の最初の出会い。
それからと言うもの不思議な事が連続して起きるは、お父さんに叱られ、法力とゆうものを修行させられるは……。
おまけに、同じ中学校にお父さんが3人を入れるから、私が3人のお守り役……。
西遊記って、3人が和尚様を守ったんじゃなかったっけ？？
そんな事を何度呟いたか解らない3年間を過ごしてきた私。
お蔭で朝食は賑やかだ。
まぁ……お父さんがいつも居ない寂しさからは開放したけどね。
「さて、洗い物は終わったし、そろそろ時間だね」
私はそう呟き、畳の部屋に戻る。
「皆準備はいい？？　そろそろ行くよ～。白、お留守番よろしくね～」
私はそう声をかけた。
「もちろんですよ」
とニッコリ微笑む凛ちゃんに、
「もうそんな時間なの！？」
と、多分原因は卵だろうが、取っ組みあってる手を止めてこちらに振り返る桃と、
「あ～い。こっちはＯＫで～す」

同じく取っ組みあってる手を止めて、桃の下になってる沙紀はこちらを向いて返事をする。
呼ばれた白は、一つジャンプをして私の言葉に応えた。
「それじゃ行くよ〜」
私は再び声をかけて玄関(げんかん)へと向(む)かう。
「はい」
「うん」
「あいさ」
とそれぞれが返事をして私の後を続き、玄関へ。
え？　何処に行くのかだって？
それは、私達四人が同じ学校の制服を着てるから行く場所は一つ。

「今日も一日、学校生活を頑張りましょう！」
の言葉に『お〜！』と返す３人。
今日も新しい一日の始まりです。
私達四人が向かうのは、新学期始まったばかりの高校です。
そう。
私達四人は女子高生なのでした。

第一話　三人と一匹の出会い
終わり。
そして2話に続く。

第一話　三人と一匹との出会い　（後書き）

初めましてこんにちは＾＾　霞河絢香といいます＾＾　拙い文章ですが、読んでいただけたら光栄に思いますｗｗ

この作品は、絢香のブログで書いているものの一つですｗ　よかったら気軽に遊びに来てくださいね＾＾

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその1

そう、それは、私が中学1年生になりたての頃に、お父さんの言いつけを破って近づいてはいけない倉に近づいた事が、私の奇妙な人生の幕開けでした。
倉で出逢ったのは、あの『西遊記』の妖怪三人の娘と一匹の妖怪。その不思議な出会いから、私は、寺の娘ながら今まで不思議な事や幽霊や妖怪を信じなかった事を信じるようになり、今では3年間で法力という不思議な力を操るまでに成長を遂げた訳です。
そして私はその三人と一匹と共に暮らし、見事普通の女子高生が夜な夜な悪さをする妖怪を退治するという不可思議な女子高生として生活をするハメに……。
これは、そんな普通じゃない女子高生の私と、三人の半妖の美少女と一匹の妖怪が繰り広げる物語です。

は～いそこ～。可愛いからって桃にお菓子を与えな～い、可愛がらな～い。さらにおサルっぽくなるから（笑）。

☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその1

ただ今、3限と4限の間の休み時間。
私達三人は、やや見慣れてきた自分達の教室に居た。
「桃ちゃ～ん。は～い、あ～ん」
「あ～ん」
女生徒に言われるままにあ～んと口を開ける金髪のショートカットをした桃と呼ばれた女生徒。スタイルは中々良く、ちょっと小柄

で、青い瞳と元気な様子が印象的な美少女である。
　悪く言えば『ガキっぽい』が正解。小柄だし。
「ありゃ、親の悟空が見たら泣くな～」
　と、腰まで伸びたロングストレートの赤髪を後ろで一つにまとめた、スタイルが良く胸の大きい女生徒が私の側で呟いた。綺麗な顔立ちに赤い瞳が印象的な美少女である。
「ははは。もしかしたら一緒に『あ～ん』ってやってたりして」
　なんて冗談と共にニッコリ笑って言う、綺麗な黒髪を肩まで伸ばした清楚そうな女生徒。こちらもスタイルが良く三人の真ん中ぐらいの胸のサイズ。そして全体から清潔感を漂わせており、淡い紫の瞳が印象的な美少女である。
「う～ん……いいんじゃない？　あの子小柄なのにいっぱいご飯食べるし、生活費浮くから調度いいよ」
　と、桃を見ながら呟く私。
「でもあれじゃ、まるっきり猿だね～」
「まぁ、飼い主の蘭さんがいいって言ってる事ですし、本人も喜んでる様なんで、ほっときましょうよ」
　ニコヤカにそう言う凛ちゃんに、
「私、お猿さんを飼った覚えないけど？」
　ジロ見しながら紙札をちらつかせる。
「そうですね」
　と微笑みを見せる凛ちゃん。
「ンじゃお嬢、俺はそろそろ席に着くね」
　と言って軽く手を振り一番端の隅っこの席に戻って行く沙紀。
「お弁当はいつもの所で渡すね、沙紀」
『あい』と軽い返事。
「そろそろチャイムだから教室戻るね～、またね～桃ちゃん」
「うん。またね～、おいしかったよ～」
　とニッコリと満面の笑みを見せる桃。
　その笑顔に頬を軽く赤らめて教室から出て行く女生徒。

「いい仕事してるね、桃」
「ぇえ、でもあれは無意識にしてますから、罪作りな桃さんです」
私の呟きに直ぐ後ろの席からそんな言葉を返す凛ちゃん。
どこか感嘆すべきなのだろう。
私はそう思いながらチャイムが鳴るのを聞いたのだった。

「もうちょっと味わって食べてよね。毎日私が作ってあげてるんだから～」
「桃さん、ご飯粒飛ばさないでくださいよ～」
「ン？　別に無茶して食べてる訳じゃないよ？　ボク」
「おま……良く食べるねぇ……」

スーっと吹く風が、春の匂いを私達に運ぶ。
ここは1号館の屋上。
私達1年生の教室などがあるのが1号館で、2年生は2号館・3年生は3号館という様に校舎3つあるのだ。
「味わってるよ～、蘭ちゃんのお弁当最高だしね」
と、ご飯粒をいくつか口の周りに付けてニッコリ。
「この笑顔で、何人の女生徒落したことやら」
ふと呟く沙紀。
その言葉に、どこか羨ましいというニュアンスが含まれてる様に感じた私。
「沙紀さんは人と普段話さな過ぎなんですよ。いつも蘭さんと話す以外寝てますし、他の人と話す時は無表情ですからね」
「う～ん？　俺、綺麗な子にはシッカリと表情見せてるけど？」
「そうそう。エロガッパだしね」
と、何気なく言った桃に、沙紀は『なにくそ～』とヘッドロックをする。
「さて、どうでもいいけど、本題に入るよ」
「『どうでもいい』を蘭さんから戴きました～」
と、ニコヤカに言う凛ちゃん。

「最近、女子高生ばかり失踪（しっそう）してるの知ってる？」
私は食べ終わったお弁当を片付（かたづ）けながら本題に入る。
「ええ、最近で四人の女子高生が失踪してますね。置手紙（おきてがみ）も何も無く突然（とつぜん）」
そう。最近そんなニュースが話題をよんでいるのだ。
失踪する様子（ようす）なんて何も無いそんな子ばかり、既（すで）に四人も。
置手紙も動機もさっぱり無いため、警察でもお手上げらしい。
「単なる家出か何かだと思う？」
私の問いかけに首を縦に振る者は誰一人とも居ない。
「家出（いえで）なら何か残すけどな～、何か理由を知って欲しいと思うし、ボクは」
と、箸先（はしさき）を口にくわえながら意見を述（の）べる。
「しかもそんな事をするような子じゃない子ばかりで、動機すら見つからないって事だしね。ちょっと変な気がするな俺は」
食後（しょくご）の、ミニペットボトルに入ったストレート紅茶を飲みながら言う沙紀。
「何かの気の迷い……とも考えられそうですけど、突然消えたように、その場所には今までそこに居たような痕跡（こんせき）を残してると聞きますから、家出では無い様に思えますね」
「うん。そらしいよ」
凛ちゃんの言葉に相槌（あいづち）を打つ私。
「何かに例（たと）えるなら、その場で連れ攫（さら）われた様な事だよね～、それって」
口の周りのご飯粒を取り食べながら言う桃。
「でも他者の痕跡が無いから、警察はお手上げという事か」
「連れ攫われじゃ無いとしたら……やっぱり自分から何処（どこ）かに消えたですね。突然何かに導（みちび）かれるように」
「または……」
私はふと思いついた事を
「その場で妖怪か何かに連れ攫われたか……」

と、言い、
「食べられたか……ですね」
凜ちゃんが私が考えた意見の続きを述べる。
その場の空気が一瞬変わる。
「ま、どっちにしろ、妖怪絡みって事は強いと思うな俺は」
と、沙紀はミニペットを飲み干す。
「妖怪なら、まだ増えますね。食事を始めた妖怪は大勢を食し始めますから」
ニッコリ微笑む凜ちゃん。
「ごちそうさまでした〜。妖怪ならやっつければそれですむよ」
満足げに桃。
「バ〜カ、そう簡単に見つかる訳無いでしょ。全くこの単細胞ザルが」
「むかっ。そう言うエロガッパは何か見つけた訳でもないでしょ！」
「また喧嘩……。もうどうしようもないですね〜」
ははは……と苦笑いを浮かべる凜ちゃん。
そんな私は、凜ちゃんにどっちがいいと問いかけ、なら『こっちで』と微笑む凜ちゃんの反応どうりにする。

ゴスッ。

鈍い音が軽く響く。
「は〜い先生、辞書は頭を殴る為に存在するんじゃないと思いま〜す……」
「蘭ちゃん、けっこうコレ痛いよ……」
各々（おのおの）が痛みを堪えながら頭を擦り呟く。
私は辞書の角で二人の頭を殴ったのだ。
凜ちゃんに『辞書』と『紙札』を見せて選ばせたら、辞書を指差したので、リクエスト通りに辞書でお仕置きしたのだった。

「痛いのは生きてる証拠。良かったね痛み感じて」
と淡々（たんたん）とした口調で告げた。
「まぁ、最近この辺の事件ですから、近いうちに情報が集まると思いますよ〜。闇雲に動くより、それからでもいいかもしれませんね」

「そうだね。折角顔を出しそうって時かもしれないし、そんな時に私達が動いちゃったら、相手も身を隠してしまいそうだしね」
凛ちゃんの意見に賛成する。
「そんじゃ、お昼も話も終わった事だし、俺はちょっとブラついてくるね」

と立ち上がり校舎内に戻って行く沙紀。
「ナンパの下見？　程ほどにしてよね〜」
私の言葉に『あい』と軽く返す。
「それじゃボクも行くね〜。さっきお菓子くれた子達にまたくれるって呼ばれてるから」
と桃もニッコリとして立ち上がり、元気良く手を振って校舎内に戻って行く。
「あははは……」
ふと凛ちゃんを見ると、苦笑いを浮かべる。
「私は特に用事は無いんですけど〜……何処かに行った方がいいですかぁ？」
「別に、気にしないし。ただ凛ちゃんも用事あるのかな〜って思っただけよ」
私の言葉にニッコリ微笑み、
「お付き合いしますよ」
と何かを察してそばに居る。
流石は凛ちゃん。勘が鋭い。
私は高校生活がここ数日してるけど、友達が出来てなかったりするのである。
居れば居るで色々と面倒だけど、今度は居ないは居ないでどこか

寂(さび)しいものである……。

「何(なに)かジュースおごるよ。おいで」

私の言葉に『ご馳走(ちそう)になります』と微笑み、校舎内に戻る私の後に続く凛ちゃんでした。

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその2

そう、それは、私が中学1年生になりたての頃に、お父さんの言いつけを破って近づいてはいけない倉に近づいた事が、私の奇妙な人生の幕開けでした。
倉で出逢ったのは、あの『西遊記』の妖怪三人の娘と一匹の妖怪。その不思議な出会いから、私は、寺の娘ながら今まで不思議な事や幽霊や妖怪を信じなかった事を信じるようになり、今では3年間で法力という不思議な力を操るまでに成長を遂げた訳です。
そして私はその三人と一匹と共に暮らし、見事普通の女子高生が夜な夜な悪さをする妖怪を退治するという不可思議な女子高生として生活をするハメに……。
これは、そんな普通じゃない女子高生の私と、三人の半妖の美少女と一匹の妖怪が繰り広げる物語です
美しいものにはトゲがある。それはタダより怖いものは無いと同じだよ〜桃〜。だからお菓子に釣られてほいほい着いて行っちゃダメ（笑）。

☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその2

「はい、どうぞ」
私は小さい紙パックの１００％リンゴジュースを凛ちゃんに手渡す。
「どうも」
と、ニッコリ微笑んで受け取った。

私達二人は、２号館にある学生食堂に来ていた。
学生食堂は２号館一階にありスペースも中々広くとってある。けっこな人数が入れる様に・利用出来る様にとの学校からの配慮だろう。
なぜ、私達は学生食堂に居るかと言うと、ジュース販売機は３個所あるが、休み時間でほとんど売れちゃって、食堂の人が良く見ているここの販売機しか種類とかが無いのである。
「最近来た先生って綺麗だよね～」
「うんうん。同じ女の私もうっとりしちゃうよ～」
私達が学生食堂に用意されてる椅子とテーブルについた時、ふと、そんな事を耳にする。
「なんだっけ？　２年生の生物の授業を担当してる臨採の先生だっけ？」
私は小さい紙パックのコーヒーにストローを刺しながら問いかける。
「ぇえ、確か先週辺りから来てるそうですよ。何でも、他の高校の生物も担当してるとか。
どうしました？　やっぱり美人は気になりますか？」
クスクスと軽く笑いながら問い返す凛ちゃん。
「沙紀じゃないんだから、ソレは無いよ私」
『そうですね』
と、微笑み返される私。
まぁ、沙紀は美人に弱いから、直ぐにでも見に行ってるだろうけどね。
私は沙紀みたいに他人にあんまり興味を抱かないから、どうでも良く思えるのである。
例外を除いては……。
「にしても、女性なの人気あるみたいですね。ここは女生徒の方が多い学校みたいですから、男性の方が人気上がりそうですけどね」
リンゴジュースをストローで飲みながら呟く。

「そうかもね〜。男性ならもっとキャッキャしてるだろうから、ここまで人気あればいい所だと思うよ」
「またはこの先週からの間で、人望（じんぼう）を発揮（はっき）してるとですかね」
「かもね」
　凛ちゃん意見に頷（うなず）く私。
「人気のせいで肩身（かたみ）が狭（せま）い思いしてたりね」
「あははは……。この学校の直属（ちょくぞく）じゃないんで、そうかも知れませんね〜。職員としては面白（おもしろ）くないとか思いそうですし」
「人気がその先生のパロメーターじゃないんだけどね。教える事をシッカリ教えられるのが、先生の評価だと思ってるし。見た目どうこうじゃないと思ってるけど？」
「また辛口ですね、蘭（らん）さん」
　とニッコリと微笑む。
「そう？」
　何気なく問いかけた私。
　その答えに、ふふふと笑い応えた。
「ま、親身（しんみ）になってくれる先生なら大歓迎（だいかんげい）かもね」
「色々なものに追（お）われる高校生にとっては、ありがたいかも知れませんね、そうゆう存在は」
　ニッコリと微笑みリンゴジュースを飲み干した凛ちゃん。
　私もコーヒーを飲み干し、何処（どこ）とも無く私達二人は教室へと向（む）かった。

　それはちょうど、１号館への渡り廊下（ろうか）を歩いてる時だった。

　ギッ。

　私の体に何かが瞬時（しゅんじ）に駆（か）け巡（めぐ）る。
　強い殺気（さっき）だろうか、何か私に向けられたそんな気配（けはい）を感じた。
　しかし辺りには誰（だれ）も居ないようである……。

「気のせい？」
「どうでしょう」
問いかけた言葉に答える凛ちゃん。
という事は、私の気のせいじゃない。
何気ない私の一言で、意味を理解してる凛ちゃんの反応がそういっている。
「一瞬でしたね」
「うん。何かゾクッとする感じ」
「念のために魔除けと探知の為に私が薄い結界壁を張りましょうか？」
とゆう凛ちゃん。
私は、
「いいよ。それは目立ち過ぎるから、私が小さい力の結界札を貼っとく。小さいから結界にはならないけど、破られれば探知としての役割が出来るし。
まぁ、さっきのが人間だったら意味無いし、無駄な心配なんだけどね」
そういいながら小さい力の結界札を取り出して、壁に貼る。
「これでよし」
と呟いた瞬間、
「何が『これでよし』なんですか？」
と、私が貼った結界札を剥がす綺麗な細い指。
そちらを向けば、クセ毛なのかカールがかった黒髪を肩まで伸ばし、赤い縁取りをした眼鏡をかけた女性が立っていた。スタイルが良く、唇の端に小さな可愛いホクロが印象的な女性だ。
「えっと、上履きが赤だから、君は一年生だね？」
「と言う先生は、噂の生物の先生ですね？」
良く解ったね~とニッコリと微笑む先生。
「上履きの色で判断してますから、先週から来た先生だと推測されますよ」

と微笑む凛ちゃん。

「あははは、そっか～。うん、当り」

可愛らしく笑い、

「いくら壁だと言っても、一応この壁も学校のものだから、変なイタズラしちゃだめだよ～、1年生君」

とウィンクと共にたしなめる。

「はい、すみませんでした」

「解ればよし。何か悩みとかあったら何時でもおいで、私は放課後や休み時間には2号館2階の化学実験室の準備室に居るから」

と言って、結界札をグシャグシャと丸めて私に返し、軽く手を振ってその場から去って行く先生。

「札見えてましたね～」

先生が居なくなってからそう呟く凛ちゃん。

「中にはちょっとセンスのいい人が居るのよ。それに、妖怪とかそうゆう類なら触れないハズだしね」

そう。

私が貼った札は普通の人には見えない特殊な札なのだ。

まぁ……中には、不思議な物を見る事のあるセンスのいい人が居て、私の札を見る事が出来る時があるのだ。

さっきの先生もきっとその一人なのだろう。実際に札を見えたのだから。

「う～ん……」

私は軽く唸り、辺りを見る。さっきの様にもし見られても安全な場所が無いかと。

「あ。あれがいい」

私は手ごろなものを見つけ、それに新しい結界札を貼り付ける。

「なるほど。それなら見えませんしバレませんね」

私がとった行動に感嘆する。

「いくらなんでもポスターの裏なら見えないでしょう」

生徒会のポスターの裏に貼り付け、元に戻しておいたのだ。

「はい」
と、凛ちゃんはニッコリ微笑んだ。
「行こう。そろそろチャイム鳴るし」
「そうですね。行きましょう」
　自分達の教室へと戻る私達。

　ここはお昼を食べた1号館の屋上(おくじょう)。
「心配しすぎたかな？」
　私はお昼休みの時の事を沙紀と桃(もも)に話し、問いかける。
　部活をする野球部の声がグランドの方から聞こえてくる。
　そう。時刻(じこく)は既(すで)に放課後である。
「いいんじゃない？　念には念を入れて悪い事は無いと思うよ〜、ボクは」
　沢山(たくさん)のお菓子(かし)をホクホク顔で食べながら桃は述(の)べる。
「うん。俺(おれ)もいいと思うよ。タダでさえ女子高生が失踪(しっそう)してるようだし、妖怪の絡(から)みが強い気がするからねぇ」
　パーティー開けされ、広げられたポテトチップスを摘(つま)みながら同意見。
「そうですね。学校で何かある様な情報は無いですが、念には念をですね」
　一口カリッとポテトチップスを口に入れて頷く。
「八戒(はっかい)も居て、同じく感じたんなら、もしかしたら何かあるのかも知れないしね」
　沢山あるお菓子の中からチョコレートを見つけ出し、いっきに3つ四角く小さいチョコレート頬張(ほおば)る桃。
「桃さん。ここじゃ『八戒』じゃなくて『凛』て呼んで下さいね？」

「あ、ごめんごめん」
　と、後ろ頭をかきながら謝る。
「まったく覚えの悪いサルだこと」

「むかっ。なんか言った！？」

「いいえ〜、何とも言ってませんよ〜」

「あははは……態度(たいど)があからさまですって、沙紀さん」

と、苦笑(にがわら)いを浮かべる凛ちゃん。

「沙紀にはおやつあげないっ！」

と、沙紀が掴(つか)んでる棒状(ぼうじょう)のお菓子を奪(うば)い返そうとしたその時、ここに居る私達四人の時間が一瞬止まった。

「何……」

「おいでなさったか……」

「強い妖怪の反応でしたね」

「近かった！　行って見るっ！」

と、桃が一人、走って1号館から2号館の屋上へと跳(と)び移(うつ)る！

その距離(きょり)約7m。それでも軽々と柵(さく)さえ飛び越えて2号館屋上に着地(ちゃくち)する。

「バカ！　一人で突(つ)っ走(ぱし)るなって桃っ！」

沙紀の呼びかけにも答えず、2号館の屋上ドアを蹴破(けやぶ)って中には入って行く。

「あ〜あ……。あの単細胞(たんさいぼう)ザルが……」

ため息混じりに言葉を零(こぼ)す沙紀に、

「私達も急ぎましょう！」

と、凛ちゃん。

「そうね、桃が何かやらかす前に行かないとね」

「私は一応桃さんの後を追ってみます！」

「解ったわ」

私は冷静(れいせい)に言葉を返し、1号館内2階2号館への渡り廊下に急ぐ。

強い妖気は2号館の3階か2階辺りから感じ取れたからだ。

桃と凛ちゃんはきっと近くの3階から探すはずだから、私と沙紀は2階をさがせばいい。

渡り廊下も1階と2階しかないからちょうどいいし。

私は足を速め、沙紀も足を速めて目的地へと向かうのでした。

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその3

そう、それは、私が中学1年生になりたての頃に、お父さんの言いつけを破って近づいてはいけない倉に近づいた事が、私の奇妙な人生の幕開けでした。
倉で出逢ったのは、あの『西遊記』の妖怪三人の娘と一匹の妖怪。その不思議な出会いから、私は、寺の娘ながら今まで不思議な事や幽霊や妖怪を信じなかった事を信じるようになり、今では3年間で法力という不思議な力を操るまでに成長を遂げた訳です。
そして私はその三人と一匹と共に暮らし、見事普通の女子高生が夜な夜な悪さをする妖怪を退治するという不可思議な女子高生として生活をするハメに……。
これは、そんな普通じゃない女子高生の私と、三人の半妖の美少女と一匹の妖怪が繰り広げる物語です。

一瞬の強い妖気へと駆け出した私達……。向かう先にはいったい何が待ち迎えてるのだろうか、そして何故この学校で妖気が発生したのだろう……。
混沌の先に見えるもの、ソレは光か闇か。
そして真面目に前説してる自分に驚愕をするのでした（笑）。

☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその3

「チッ……」
2号館2階に着いた時、沙紀が舌打ちする。
そこに着いた時には妖気の痕跡すら消えてるのだ。

「一瞬の強い妖気だったから直ぐ消えた？」
　ふと漏らす私の言葉に、
「殺気じゃなく強い妖気なら、少しは辺りに漂ってたっておかしくは無いはずだけどなぁ……」
　続いて言葉を漏らす。
「確かに……特定しずらい大まかなものだから、直ぐ消えるなんて有り得ないかもね」
　と、相槌を打つ。
　すると、前の方からバタバタという足音共に桃と凛ちゃんの走ってくる姿が見えた。
「そっちは？」
「全然」
　私の問いかけに言葉で答える桃に、首を横に振る凛ちゃん。
「そっか……」
　呟いて、私は微かな妖気が残ってないかと気を集中させる。
　辺りの空気がシーン……と、先ほどより静けかえっていく。私の気が空気を澄まし、一片の濁りを探っているのだ。
　大きく、そして静かに範囲を広げるが……
「ダメだわ。何も感じない」
　何も反応が出て来ない事に私は中断する。
「毎回思うけど、お嬢のそれすごいな……」
「うん。完全に隠してるはずのボクの気が奥底から逆撫でられる感じ」
「三蔵法師の血を引いてるのをシッカリ感じさせますね」
　と感嘆の言葉を次々と漏らす三人。
　その時、
　ガラガラガラ！
　直ぐ側の教室のドアがスライドする！

私は思わず解放しそうな気を必死に抑えた。
固唾を飲んでスライドしたドアを見る私達。
次の瞬間、ソレは咆哮を上げた！
「廊下を走るな！」
と。
咆哮を上げてこちら見るは、お昼に会ったあの生物の先生。
「またアナタ達なの……？」
はい、すみません私達です。
と、心の中で苦笑い。
「ン？　上履きを見れば全員1年生か～。ここは小学校じゃないんだから、廊下を走ってはいけませんよ」
またたしなめられる私。
『すみません』
全員して苦笑い浮かべて謝る私達。
すると、先生の後ろから女生徒が出てきて、
「先生ありがとうございました。お蔭で少しは楽な気持ちになりました」
肩までありそうな綺麗な黒髪を後ろでアップし、髪留めで留めた綺麗な女性とが先生に微笑んだ。
「いいよいいよ、何かあったらまた来なさいな」
と、ニッコリ微笑み返す先生。
「はい。それではありがとうございました。さようなら」
先生に一礼し、私達を見て会釈して過ぎ去って行く彼女。
会釈されたので会釈を返す。
その時にふと見えた上履きの色は青色。どうやら上履きの色から3年生らしい。
「さて……と。アナタ達をこれからお説教したいけど、他校の授業案作らなきゃだから、お説教が出来ないのが少し残念かな」
可愛らしいウィンク一つして言う先生。
その台詞に、心のどこかで安堵する私。

「では、その授業案出来るまで待ちましょう。それとも一緒に別の授業案を作りましょうか」
沙紀が落しの声で、先生にそう提案する。
始まった、沙紀の悪い癖……。
きっと誰もが心の中で呟いただろう台詞だ。
「あら、嬉しぃ。私のお手伝いしてくれるのかなぁ、その綺麗な顔と指で」
どうやらノリのいい先生らしく、沙紀の言葉にのる。
「ぇえ、仰せの通りに何なりとも使わせて戴けるなら、それは本望ですよ、先生」
聞いているこっちが恥ずかしくなる様な台詞をもっともらしく操る沙紀。視線の先はきっと先生の瞳を捕らえてるのだろう。
「そぉう……それじゃたっぷりと使わせて貰おうかしら？」
「仰せのままに」
耳がかゆい。
凄くかゆい。とってもかゆい。
「な〜んて、何を言ってんの。そうゆう台詞は18歳過ぎてから言いなね」
指をピストルの様にして、バンッ！　と一つ撃って普通に戻る先生。
「それなら先生……」
「はい、すみませんでした〜。私達今後言いつけを守って学校生活をおくりますね」
「では先生、ボク達はこれで失礼しますね」
「さようなら、先生」
「ン？　はい、さようなら」
私達は沙紀の口を塞いだり、体を抑えたりしながら、各々が挨拶をしてその場から離れたのでした。沙紀を無理矢理に連れながら。
「このエロガッパ」

「いくらなんでも、自分達の歳を言う訳には行かないですよ、沙紀さん」
罵倒する桃に、苦笑い一つ浮かべる凛ちゃん。
「わりぃ……。ちょっと調子に乗った」
後ろ頭をかき、苦笑い。
1号館の屋上に戻った私達。戻って直ぐに注意をしたのだ。
「それにしても、2階か3階と言うくらい大きい妖気だったのに、痕跡一つも残って無いのは……不思議」
私はポツリと呟く。
「ええ、私と桃さんが探し出した頃には急に消えて、目視で探すしかありませんでしたよ」
「うん。いろんな教室見たけど、皆部活とか帰宅とかしてて誰も居なかったね～。妖怪だって見当たらないし」
再びお菓子を食べ始めながら言う桃。
「俺達も行った時には妖気が消えちゃってたな……」
「私が気を探しても見つからないくらいね」
「ここで『アレは気のせいだった』で通じるものじゃないですしね」
と、ニッコリ微笑んで頷く凛ちゃん。
「真相は闇の中。だね」
「難しい言葉をサルが知ってるとは思わなかったなぁ」
「沙紀さん、それはあんまりにも酷いかと……」
「なんかむかっ」
「あ～……もう。喧嘩なら他でやりなさい」
私は紙札を取り出して忠告する。
「うん……」
「あい……」
「あははは……」
それぞれの頷き声に、乾いた笑いが日の暮れる屋上に小さく響いたのだった。

「とりあえず、今夜は何事も無ければいいけど」
私は呟いて、帰りの身支度を始める。
それに合わせて、三人も身支度を始め、私達は家路へと向かうのでした。

「鏡は真実を見せる為にある。それが負であっても、映し出さなきゃならない。
だけど、虚像の負ばかり映し出し不安にさせるばかりの鏡は、既に『鏡』ではあらず。
解る？　私の言葉の意味」
私は一枚の大きいアンティークの全身鏡に紙札を貼りつけ終えて、静かに述べた。
そこは、とある寂しい公園。遊ぶ者も居なくなって、片隅にはごみ置き場の様に粗大ゴミがいくつも置かれている……。
暗闇に薄っすら光る街灯の光に照らされる私の姿。その先に鏡は壁に立て置かれている。
『映すだけ物に説教を？　映し出されるだけの者が御託を並べるな。
私は真実を見ない者にもっと真実を見せただけに過ぎない』
鏡は、ぬめりある光を反射させ、私の言葉に反論する。
「真実をみてどう思うかなんて、その人、それぞれが考えるべき事だと思うけどなぁボクは。
だから、無闇に負だけを見せ続け、心に不安ばかり与え続ける鏡はボクは許せない」
私の後ろにいた桃が姿をみせてそう告げる。鏡に映し出された姿は長い尻尾の生えた鋭い目の半妖の桃の真の姿。
鏡の妖怪が桃の真の姿を映し出しているのだ。
「よって、私はここに汝に告げる。そう『滅せよ』と」
私の言葉と共に紙札は強い閃光を放ち、
『ぐげぇぇえっ！』

鏡に宿った妖怪の断末魔が響き渡ったのだった。
するとそこには、パリンッと、割れる全身鏡だけが残っていた。
「よし。追い込み退治終了だね」
微笑む桃にハイタッチ。
夜な夜な醜い姿をした人間がうろつき、人々を怖がらせている事を聞いた私達は、夜の仕事をしていたのだ。
そう、私達の本職妖怪退治。
今回は、妖怪の半身であるうろつく妖怪を桃に追わせ、私が前もって確信していた残り半身のそばに隠れて、追われた半身が傷を癒す為に戻ってくるのを待ったのだ。
そして戻りきった直後、私が紙札を貼って動きを止め、今にいたる訳である。
「ご苦労様、桃」
「私達、今回は要らなかったですね」
トコトコと歩いて来る沙紀と凛ちゃん。凛ちゃんはジーンズに黒の長袖に、白のTシャツを重ね着したような長袖Tシャツ姿で、沙紀はジーンズにクリーム色のパーカー姿である。夜なのでクリーム色は見えずらい。
「まぁ、何かあった時のためかな」
そう返す私。
「終わった事だし、帰って何か食べよ～。お腹空いたよぉ」
「おま……相変わらず電池切れ早いな、桃。さっき夕飯食べたばかりでしょ」
「高性能だから早いんだよ～ボクは」
「あははは、だそうです」
愉快に笑いながらそう言う凛ちゃん。
「うんじゃ、残った鍋の汁でうんど作ってあげるわ、桃」
「やった！」
メンズ服で揃えた七部丈のズボンにオレンジ色の長袖Tシャツを着た桃が喜ぶ姿は、どこか少年の様に思える私。

容姿はいいんだからもっと女の子すればいいのにとか、どこか思う。
なんて、ジーンズに大きめのメンズTシャツを着た私が言える事ではなんいだけどね。
「では帰りましょうか？」
「そだね」
「帰ろ～」
「うぃ～」
それぞれが頷いた時、
『なっ』
全員が驚愕の声を漏らした。
それはどろっとした気味の悪い大きな妖気……。
どんどん妖気が近づいてくるのがひしひしと伝わってくる。
「来ますよ！」
凛ちゃんの声に私達の気は一瞬昂った。
そんな中、私達が居る公園の前の通りを通り過ぎていった何かを見た私。
「人間が、女の子が、気色の悪い妖気と共に通って行ったよ！」
桃がそう叫ぶ。
私達の場所から通りまでは距離があり、私の目では確認は出来なかった。
「軽く浮いてましたね……」
「ぁあ、何かに運ばされてる様に」
凛ちゃんの言葉に相槌を打つ沙紀。
「とりあえず追うよ！」
私は言って駆け出した。
私の駆け出しに皆も駆け出し、その女の子を追うのだった。

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその４

　そう、それは、私が中学１年生になりたての頃に、お父さんの言いつけを破って近づいてはいけない倉に近づいた事が、私の奇妙な人生の幕開けでした。
　倉で出逢ったのは、あの『西遊記』の妖怪三人の娘と一匹の妖怪。その不思議な出会いから、私は、寺の娘ながら今まで不思議な事や幽霊や妖怪を信じなかった事を信じるようになり、今では３年間で法力という不思議な力を操るまでに成長を遂げた訳です。
　そして私はその三人と一匹と共に暮らし、見事普通の女子高生が夜な夜な悪さをする妖怪を退治するという不可思議な女子高生として生活をするハメに……。
　これは、そんな普通じゃない女子高生の私と、三人の半妖の美少女と一匹の妖怪が繰り広げる物語です。

　何かに運ばれる様に、私達が居る公園の前を通り過ぎてった一人の女性。ソレは気色の悪い妖気と共にしていた……。
　彼女の身に一体何が……彼女を追うその先に何が待ち迎えてるのだろうか……。
　一番の問題は、桃が夜食のおうどんを我慢できるかどうか！？（笑）
　私達はそんな中、通り過ぎ去った彼女を追うのでした

　☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

第二話　教師と生徒のいけない関係の先に。ーその４

「速いか」

沙紀が走りながら漏らす。
私達は公園から駆け出し、気色の悪い強い妖気と共に過ぎ去っていく女性を追っている。
追っているが、相手のスピードの方が上で、中々追いつけないで居るのだ。
「目視で追いかけるのは限界がありますね」
「けっこう速いしね」
凛ちゃんの言葉に相槌する桃。
「コレだけ強ければ、気を探れば居場所が特定出来るかもしれない」

ふと私は走りながら言う。
「なら走るのやめていい？　お嬢」
「あんまり遠いと探しにくいから、やっぱ追うしかない気もするわ」

「あははは、どのみち走るんですね」
軽く乾いた笑い声を響かせる凛ちゃん。
あ、こうすれば……。
私はふと思いつき、
「結界札ですか？」
結界札に気を入れて前方を進む彼女向かって飛ばす。

ヒュゥウゥッ！

札がいきおい良く空を裂き進み、前方の彼女の背中にペタっと貼り付く。
「なるほどね。遠すぎても自分の気を追えばいいように目印をかぁ」
感嘆の声を上げて、足を止める沙紀。
「自分の気なら遠くにあっても、妖気を探すより簡単だからね」
「蘭さんならではですね」

と、ニッコリ微笑む凛ちゃんに
「ちょっとは疲れなくてすむや」
足を止めた桃。
「何があるか解らないから少しでも体力を温存しとかないとね。私は皆と違って体力は無いから頭使わないといけないのよ」
人一倍体力はある方だけど、流石に『人一倍』単位じゃ、半妖の三人には負けるのが当然である。
「だから、体力仕事は皆に任せるわね」
「あれだけ走れて息が上がってないお嬢も凄いと思うけどなぁ」
「体力修行の賜物ですね」
と言う二人に、
「私は、出来る事なら普通の女子高生で居たかったわ……」
少々愚痴る。
実際、夜な夜な妖怪退治をしてる女子高生なんて聞いた事無いし。それに私だって、本当なら普通に女の子して高校生活を送っていたはず。

沙紀に桃に凛ちゃんに白。三人と一匹に会わなかったら、私は普通で居られたのかも知れない。
いや……。ソレは違うかも……。
私が三蔵法師の血をひいてる限り、遅かれ早かれこうなってたのかも知れないか。
心の中でふと呟く。
「どうしたの？　蘭ちゃん？」
「なんでもな〜い」
桃の声にふと戻り、言葉を返した。

「やっぱりここなんだ？」
「まぁ、今日の事ですし、ここが印象に残っても仕方ありませんね」
「今度は逃がさないからっ」

三人が各々漏らした場所は、
「気を探ったら、ここに行き当たった。それに放課後の事もあるし、やっぱり見たいな感じはあるね」
一瞬強い妖気を感じた私達が通う高校だった。
「それじゃ、鬼（おに）ヶ島（しま）へ鬼退治に行きましょうかね～」
「桃太郎ですか～」
沙紀の言葉にクスクスと笑う凛ちゃん。
「ちょうど三人居ますしね。桃さんはそのままお供のおサルさんですね」
「うんじゃ、俺は何だろうねぇ」
「犬だよ犬っ」
「それでは私はキジですかね」
犬発言（いぬはつげん）する桃に合わせてキジ発言。
「キャンキャンうるさいし」
「ぁあそぉう。桃はキーキーと騒（さわ）がしぃは単細胞（たんさいぼう）だはでお似合（にあ）いだな」
お返しとばかりに嫌味（いやみ）を言う沙紀。
「お供ならお供らしく、馬鹿（バカ）な事言ってないでシッカリ着（つ）いてきなさい」
私はそう言葉を残して、一人校門の先を進む。
「へいへい」
「蘭ちゃん待ってよぉ」
「あははは……」
それぞれが私の言葉に答えて、後を着いて歩くのだった。
私達が２号館１階の出入り口に来た時、軽く何かが漂（ただよ）ってる気がした私。
２年生専用の木の下駄箱（げたばこ）と、下にはスノコが敷（し）き詰（つ）められている。
「罠（わな）とか無いですよね？」
「さぁ？　大将の鬼さんに子分（こぶん）は付き物だけど？」

凛ちゃんの言葉に柄のついた白い鞭を空間から出現させる沙紀。
「叩けばそれで良しじゃない？　居たってもさ」
と、刃の付いたトンファー空間からを出現させた桃。
「用心はした方がいいかもね」
私は一枚の紙札を取り出し、
「発っ」
気と共に、紙札を錫に変形させる。
「あははは……。備えあれば～ですかね」
ちょっとしたタメ息と共に、空間から長く曲がった刃の鎌を出現させた。
その言葉が合図か、いくつものやや小さい妖気が私達四人へと向かってくるのを感じる私。
「結界を張らなきゃダメ？」
「お嬢、冗談でしょ？」
私の言葉に軽く笑って答える沙紀。
「多いけど、平気かな～ボクは」
「右に同じですね」
頼もしい三人の言葉。
丁字の廊下の左右からいくつものの、黒い中型犬くらいの蜘蛛の妖怪がこちらに顔を覗かせている。
「心配じゃないわ。個々でやるより一気に消す方が楽かなって」
「少しは運動しないと太りますし。動きますよ」
と、微笑み、スノコが敷いてある場所から、右の廊下へと向かう凛ちゃん。

ザシュユッ！

鎌の柄を持ち、回転して、一気に襲いかかる四匹の蜘蛛を斬り裂いた。
「凛、ダイエット中だったっけ？」

バシイィッ！！
沙紀の操る鞭が、白い一閃を描き、瞬時三匹の蜘蛛を消滅させる。
そして直ぐ様左の廊下へと向かい、襲い来る蜘蛛を次々と消滅させて行く
「うわ、楽しそ〜う……」
その様子を見ながら、出番無しという感じの桃は恨めしそうに呟いた。
すると、後ろ出入り口の方から同じ様な妖気がいくつもの感じてくる私。
「桃、来るよ！」
私が叫ぶより早く、
「知ってるっ」
嬉しそうにトンファーに付いた刃で斬り裂き、対応していた桃の姿。
襲い跳び来る蜘蛛を次々と叩き落して、刃のある方で斬り裂いていく。
そんな三人を見てて何だか私も、ふと、
「暇だなぁ」
なんて呟く。
囲まれた状況なのに、どんどん妖気が減っていく事に緊張感も薄れていく。
『ラストっ』
沙紀と凛ちゃんの声がハモり、廊下の左右の妖気が完全に消えていった。
「手伝いましょうか？　桃さん」
「こっち終わったし」
「ヤダ！　こっちは少ないんだからボクがやる！」

と、こちらによそ見をするくらい余裕(よゆう)があるらしい。

「へいへい」

「それじゃ私達は先を急ぎましょうか？　蘭さん」

私はそう振(ふ)られて、

「そうだね。あと少ししたら終わりそうだし、ここに運ばれた女性も心配だしね」

そう意見を述べる。

「では桃、俺達先に行ってる～」

「直(す)ぐに追いつきますよ、桃さんなら」

別れ言葉を残して廊下の右へと向かう私達。

妖気が強くなってるのが右の廊下の方で、私がくっつけた結界札の気もこっちから感じるのである。

「あ、ちょっと待ってっ」

断末魔(だんまつま)が響き、残してきた最後の妖気が消えるのを感じた。

終わったようね。

心の中で呟き、二人を見る。

「随分(ずいぶん)大きい妖気だこと」

「そうですね、先ほどの妖怪とは違って大きいですね。おそらく……」

「『大将の鬼』って所ね」

二人の言葉に頷く。

私達が進む先は、体育館へと続く一本道の外廊下(そとろうか)。

ぐんぐん進み、大きな体育館の扉(とびら)前へと足を止める私達。

「さてと『鬼』が出るか『蜘蛛』が出るか」

「気を引き締(し)めましょうね」

「開けるよ」

私は呟いて扉に紙札を貼り付け強めに気を紙札へと送る。

すると、大きな扉が右へと重くスライドし始める。

ドンっ！

大きな音が響き、大きな扉は完全に開く。
私達は体育館の中に入り、中央、バスケットコートラインが引かれた所に立っている者へ
「こんばんは」
と挨拶をしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2297c/

☆。砕妖魔乙女伝　彩優記。☆

2010年10月28日08時27分発行